

○ 田舎者八幡神社秋季例大祭

御在所上人 保木金

古くより続く例大祭



この例大祭の特徴である、「ちょうさ(太鼓)」について。現在町廻りには車をつけて運行しているが、昭和三十年半ばまで担ぎ手に担がれていたようで、戸袋や屋根を壊すことともあつたとい。日曜日には五十人以上の肩に担がれ境内を練り廻り、御旅所へ向かう御浜出、お宮へ帰る御入りの時には海へ飛び込む「ちょうさ(太鼓)」もあり観衆を楽しませている。いかだの様に組んだ担棒は、各地の太鼓屋台のなかでも珍しく、海入りの際の安定に關係があると思われる。また空襲に遭わなかつことや新調せずに修繕してきたことで、当時の姿を留めていると考えられ、太鼓屋台の歴史を調べるうえでも貴重な文化財である。

日和佐八幡神社秋季例大祭については一年の豊漁豊作を祝う氏子の祭りとして、古くから行わってきた。明治初年からは旧暦八月十五日として続けてきたが、九州出漁団の便宜も考え新暦九月十五日に改められた。しかし台風や悪天候が多く昭和四十一年から十月十五日となり、昭和四十三年から「体育の日」の十月十日に改定された。その後、平成十二年から「ハッピー・マンデー制度」により十月の第二月曜日の前々日の土曜日に町廻りや宵宮を、前日の日曜日に本祭りを行うようになった。

各地区に代々伝わる宝 「ちょうさ（太鼓）」

日和佐八幡神社秋季例大祭の大きな特徴である「ちょうさ（太鼓）」は、町内八地区が運行しており、一番歴史の古い戎町は寛政七年（1795年）に廻船問屋の谷屋が、閑西（堺）から職人を集めてつくったとも、買って来たとも伝えられている。

以後享和二年（1802年）に東町、享和四年（1804年）に西新町、文化十五年（1818年）再び西新町、天保八年（1837年）に中村町、天保九年（1838年）に本町のものが作られたと、日和佐在住の糙谷義一氏所蔵の「よろづひかへ覚」（大工重兵衛の記録）の中で記録がある。

さらに、奥河町には嘉永四年（1851年）と記した太鼓衣装箱がある。恵比須浜のものには立派な彫刻があったが、昭和41年（1966年）11月の火災で類焼し、昭和48年（1973年）に新調。桜町は昭和21年（1946年）に西新町から初代を譲り受け、翌22年（1947年）から参加している。

日和佐の「ちょうさ（太鼓）」は大浜海岸を練り歩き海に入ることから、担棒は井桁に組み、また、戦争中に空襲等の被害にもあわなかつたことから、当時の造りが残されている。

なお、「ちょうさ（太鼓）」を運行する八地区は次のとおり。

戎町・東町・西新町・本町・桜町・中村町・恵比須浜・奥河町。

各地区で布団の色等で特色を出している。

太鼓屋台は地方によっては「布団太鼓」「太鼓台」「ヨイヤショ」「サシマショ」等と呼ばれているが、この日和佐地区では「ちょうさ」「太鼓」と呼ばれている。



日和佐八幡神社が誇る 八台の「ちょうさ(太鼓)」



戎町

日和佐で最も古く寛政七年（1795年）に作られた記録が残っています。当時の豪商であった谷家が 関西から職人を集めて作ったとも、買ってきただとも伝えられています。

西新町と共に八地区の中で最も重い「ちょうさ(太鼓)」です。



西新町

享和四年（1804年）に初代、文化十五年（1818年）に現在の物が作られています。初代は軽く暴れて困るとの理由から、二代目が作られたと伝えられています。

戎町と共に八地区の中で最も重い「ちょうさ(太鼓)」です。



桜町

昭和21年（1946年）に西新町から初代（享和四年、1804年）を譲り受け翌22年（1947年）、八番太鼓として祭りに初参加しました。戦後厳しい時代の中で「ちょうさ(太鼓)」を奉納運行したいという、先人たちの祭りへの思い入れが感じられます。



恵比須浜

かつては立派な彫刻のある「ちょうさ(太鼓)」を所有していましたが、昭和41年（1966年）の火災で類焼してしまいました。現在のものは昭和48年（1973年）に新調したもので、八地区の中では一番新しい「ちょうさ(太鼓)」です。



東町

享和二年（1802年）に作られた記録があり、日和佐浦地区からなる浦三町の一地区です。

浦三町の中では軒数が最も多く、現在でも漁師町の雰囲気が残る活気ある地区です。



本町

天保九年（1838年）に作られた記録があり、八地区の中では最も小さな地区ですが、古くは日和佐の中心街がありました。

少ない軒数で祭りに「ちょうさ(太鼓)」奉納運行していたことを考えると、当時の繁榮ぶりがうかがえます。



中村町

天保八年（1837年）に作られた記録があり、日和佐浦地区からなる浦三町の一地区です。日和佐では唯一「結び」の部分が讃岐型の形をしており、太鼓屋台のルーツを探る上でとても貴重な「ちょうさ(太鼓)」だといえます。



奥河町

作られた年の記録は残っていないが、嘉永四年（1851年）と記した太鼓衣装箱が残っています。

他の地域ではよく見かける赤一色の布団ですが、日和佐ではめずらしく奥河町の特徴となっています。

年に一度の晴れ舞台 きらびやかな飾り付け

「ちょうさ(太鼓)」には金糸のしめ縄や色とりどりの布団、黄金に輝く飾り金具など、豪華絢爛な飾りが施され、見るものを楽しませていますが、一年中この姿というわけではありません。

日和佐では秋祭りの一週間前のことを「一ノ宮」と呼び、毎年一ノ宮になると各町太鼓若連中がそれぞの「ちょうさ(太鼓)」が格納されている「太鼓納屋」に集まり、細部まで分解された「ちょうさ(太鼓)」の組み立て、飾り付けを行います。

各町によって組み立て方や「ちょうさ(太鼓)」自体の構造も違っていて、中には構造上分解できずに一年中組みあがったままの町もあります。



先人から伝わる町の宝

日和佐八幡神社秋祭りの一番の見所である「ちょうさ（太鼓）」の運行ですが、「ちょうさ（太鼓）」は担ぎ手だけで運行しているわけではありません。そこには男性だけではなく、女性も積極的にお祭りに参加し、その町全体で運営していると言つても過言ではあります。老若男女、一丸となつて町の宝を後世に伝えるために「ちょうさ（太鼓）」運営をして います。



太鼓若連中 (たいこわかれんちゅう)

各町の「ちょうさ（太鼓）」の運行・管理などを担う若い衆のこと。若連中内でも序列があり、責任者、副責任者などが中心となり、「ちょうさ（太鼓）」の運行をします。各町ともに35歳前後の若者が責任者となり、その役を勤め上げると若連中を卒業します。町によっては卒業した人をOBなどと呼ぶ町もあります。



拍子木（ひょうしき）



打ち子（うちこ）

「ちょうさ（太鼓）」の太鼓を叩く小学生、中学生、高校生の子供達のこと。
この打ち子が叩く太鼓の音がこの祭りの原音であり、担ぎ手たちの力となります。



宿老（しゅくろう）

太鼓若連中を卒業したその町の指導者の存在。采（ザイ）と呼ばれる紙や布で作られた采配で「ちょうさ（太鼓）」の進行方向を示している。



当家・富屋（とうや）

各町の各班で毎年順番に廻り、料理や飲み物の用意、衣服の準備など、祭りを屋台骨として支えています。
女性の方が中心となっており、お祭りにはなくてはならない存在です。



日和佐八幡神社

日和佐八幡神社

日和佐八幡神社

日和佐八幡神社

日和佐八幡神社



平成の大改修により 一層輝きを増した金神輿

町廻り、本祭りの両日、日和佐八幡神社の大神様の御靈をお遣しになる御神輿です。大きさは約二メートル四方の大きな御神輿です。

この御神輿については、他の神社で使用されておりましたが、大きすぎるために担ぐことができなくなるからということで、当神社が引き取ったと伝えられております。昭和40年頃（1965年～）に昭和の大改修をし、平成25年（2013年）にも氏子の皆様のご淨財をもって、平成の大改修を行い、大神様の御靈を御載せする立派な御神輿となっております。

人出不足のため御神輿の御浜出、御入りに車輪をつけなければならない時代が過去にありました。そうした事態を防ぐため太鼓若連中を卒業した者や、「ちょうさ（太鼓）」を所有しない地区的青年有志が集まり、昭和57年（1982年）に氏子青年会を結成しました。

以後、御神輿の運営管理はこの氏子青年会が担っています。



祭りに彩りを添える 先人の想いと新たな試み



ギャルみこし

例大祭をさらに盛り上げようと、日和佐八幡神社氏子青年会を中心となり平成12年（2000年）にギャルみこしを結成いたしました。平成19年（2007年）に現在のギャルみこしを新調し、主に町内の高校生から20代の女性が中心となり活動を行っております。

県内のギャルみこしの先駆であります。



寺辺のだんじり

このだんじりは、江戸末期～明治初期に堺市で作られたもので、喧嘩などで魔物になっていた物を阿南市（福井村大宮部落）が購入し、その後、同じく阿南市（富岡）に売却しました。その富岡から大正六年に50円（当時）で寺辺が購入したと伝えられています。昭和初期までは桜町と共に、「たたら節」「伊勢音頭」を唄いながら町廻りを行なっていましたが、現在は地区内の過疎高齢化のため飾り付けて据え置かれております。

子どもみこし（樽みこし）

各町の幼児から小学生に担がれるみこし。子供みこしを運行している地区は戎町、東町、西新町、桜町、中村町、奥河町の六地区です。

古くより伝わる 太鼓のリズムと掛け声

ヤーレー・ヤーレー

太鼓を打ち始める際の掛け声。「今から動き出すぐ、やるぞ」などの意味。

チヨウサ

主に町通りで用いられる。「ちょうさ(太鼓)がきたぞ。」と、周囲に知らせている。また、ゆっくり慎重に進む際にも用いられることがある。

イッサンジャイ

「ちょうさ(太鼓)」運行中に一番多く用いられる。「勇んで行くぞ。」という意味で担ぎ手から宿老まで、みんなが掛け声として用いている。

サーーセー

太鼓を早く打ち鳴らし、「ちょうさ(太鼓)」を高く差し上げる時に用いる。合いの手でヤーレーと言う場合もある。

ヨイヤーサッサ

(ヨイヨイサッサ)

サーーセーのあととの掛け声として用いられる。町によって若干の違いがある。

エンエンエン

「ちょうさ(太鼓)」を置き、太鼓を終える際の掛け声。本来は置いた「ちょうさ(太鼓)」を引きずるようにして動かす際の掛け声だとも言われている。

最後に「ヤー」と言ったり、エンエンエンを用いずに終える町もある。



町廻り・宵宮

(体育の日の前々日の土曜日)

7:30~

式典

日和佐八幡神社拝殿にて早朝から斎行します。氏子、崇敬者が参列し大神様に一年間の「無病息災」をはじめ「五穀豊穣」「大漁満足」「商売繁盛」を感謝し、次の一年間についても祈願します。

9:00~

神輿町内巡幸

式典斎行後、大神様の御靈をお遷した御神輿が町内を巡幸します。

正午~

太鼓町廻り

各八地区の「ちょうさ(太鼓)」が町内を廻ります。各家々の方からお花を頂くとお礼にサーサーを行い、その家の一年間の罪穢れを太鼓の音とサーサーの声でお祓いします。

18:30~

巫女の舞

(豊栄の舞・浦安の舞)

各町「ちょうさ(太鼓)」が帰宮すると小学生児童による巫女の舞が奉納されます。

19:00~

奉納子供相撲

大神様に地域の宝である子供達の健やかな成長への感謝と祈願し、わんぱく子供相撲を奉納します。

19:30~

奉納演芸

子供相撲が終わると奉納演芸が始まります。阿波踊りや太鼓若連中対抗の太鼓選手権など、毎年嗜好を凝らした企画が催されます。

21:00~

奉納花火

境内での仕掛け花火、秋の夜空を鮮やかに彩る打ち上げ花火で宵宮を締めくくります。

本祭り

(体育の日の前日の日曜日)

10:00~

打ち子祓い

本祭りの幕開けとなる打ち子祓いを行います。各町の太鼓を叩く打ち子をお祓いします。

10:10~

太鼓据祓い

各町の太鼓納屋に据え置かれている「ちょうさ(太鼓)」、寺辺のだんじりを、無事本祭りが斎行できるようにとお祓いします。あわせて、ギャルみこし、子どもみこしもお祓いします。

10:30~

稚児祓い

去年の秋祭りから今年の秋祭りまでに、氏子並びに崇敬者の家々で生まれた赤ちゃんの健やかな成長を祈願してお祓いします。

10:40~

神輿担ぎ祓い

大神様をお遷している御神輿を担ぐ氏子青年会、各町役務をお祓いします。

10:50~

御浜出で

大浜海岸に設けられた御旅所まで御神輿、ギャルみこし、子どもみこし、「ちょうさ(太鼓)」の順に渡御します。「ちょうさ(太鼓)」は一番太鼓から順に大浜海岸に繰り出し、八番太鼓まで、すべての町が海に繰り出す一番の見所と言えます。

13:30~

御入り

八番太鼓が御旅所に「ちょうさ(太鼓)」を置くと、御神輿がお宮に戻られます。お浜出でと同じ順番で帰宮し、八番太鼓が太鼓納屋に「ちょうさ(太鼓)」を置くと、その年の祭りは終わりとなります。

18:00ごろ

手打ち式

八番太鼓が太鼓納屋に「ちょうさ(太鼓)」を納めると手打ち式となります。経代、太鼓若連中、氏子青年会らが境内に会し、祭りの無事終了の手打ちを致します。

二日間に渡る例大祭 次第

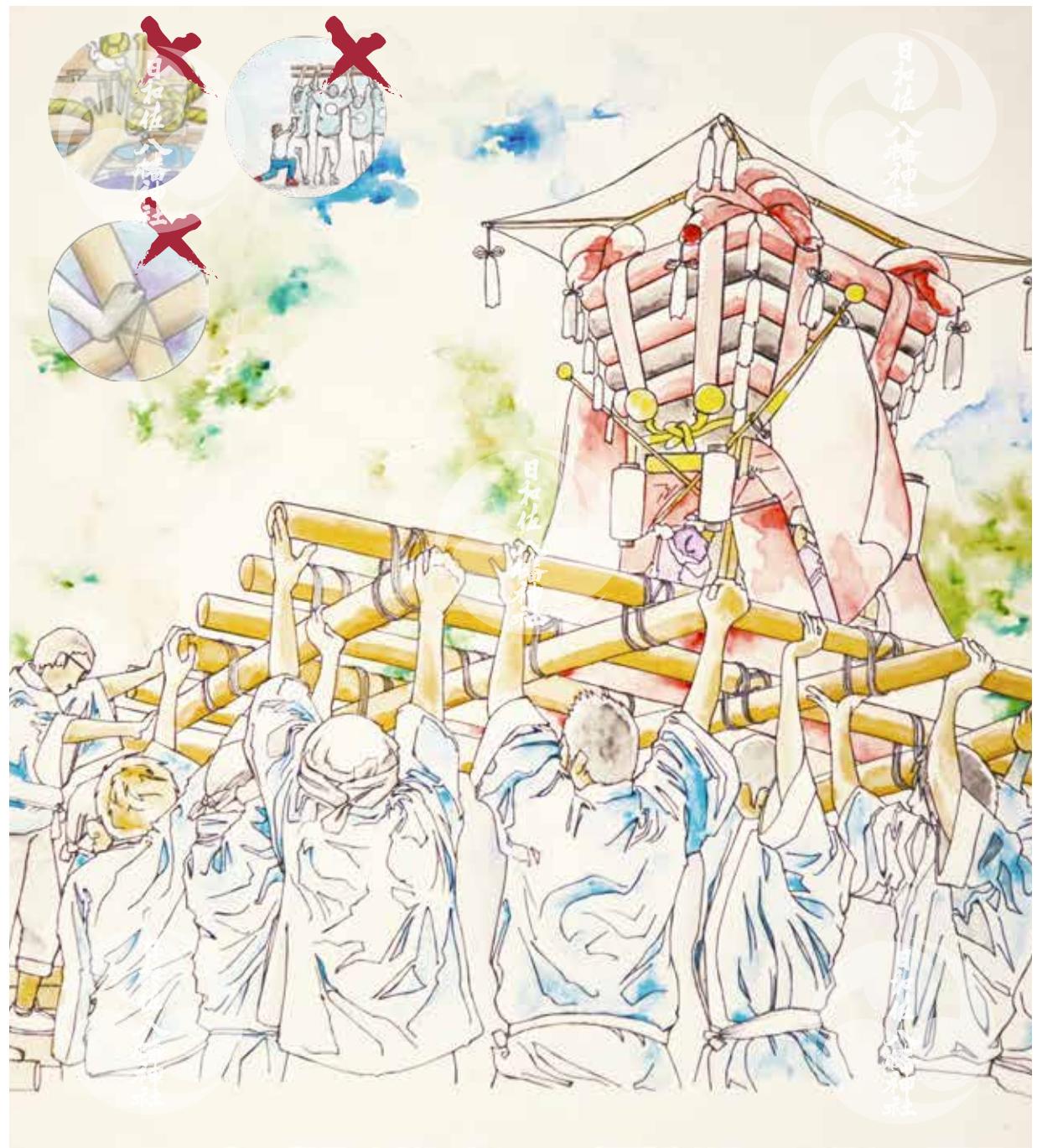
観覧・参加の心得

観覧者・カメラマン

- ◆鳥居や各神社に差し上げる時、「ちょうさ(太鼓)」と建物の間には絶対に入らないこと
- ◆「ちょうさ(太鼓)」の運行順を確認し、ちょうさの進路には入らないようにすること
- ◆差し上げている「ちょうさ(太鼓)」には近づかないこと
- ◆据え置いている「ちょうさ(太鼓)」や御神輿(飾りや祭りに関するもの)にむやみに触らないこと
※興味がある場合は近くにいる関係者(太鼓若連中)に聞いてください。
- ◆「ちょうさ(太鼓)」は地域の宝物。担ぎ棒に乗ったり、座ったりしないこと
- ◆祭りを見て楽しんで帰ること

参加者

- ◆外がわの四隅、四方は担がないこと
- ◆若連中、責任者の言ふことに従うこと
- ◆「ちょうさ(太鼓)」の担ぎ棒に乗ったり踏んだりしないこと
- ◆揉め事や問題はすべて着ている法被の町の責任となるということを理解すること
- ◆自分の着ている法被の町以外は基本的に担がないこと
- ◆祭り、「ちょうさ(太鼓)」、関連するすべてのものに最上級の敬意を払うこと



境内案内

本殿・・・・・銅板一文字葺、間口約4m、奥行き2.5m。組物・蛙叉・木鼻などに精巧な彫刻が施されている。当社の特徴である亀の彫刻もある。

瑞龜閣・・・・木造瓦葺、集会所として用いており、宵宮際には奉納演芸の舞台となる。

太鼓納屋・・・・各八町の「ちょうさ(太鼓)」及び寺込地区のだんじりが格納されている。

境内社・・・・一. 天神社(菅原道真公)
二. 淡島神社(木花咲耶姫命)
三. 道祖神社(道俣神)
四. 蝙子神社(水蛇子)
五. 加茂神社(鴨比古命)
六. 護国神社(御英靈)

大鳥居・・・・参道の入り口となる大鳥居。大きな鳥居の下で差し上げられる「ちょうさ(太鼓)」の姿は勇壮そのもの。

御旅所・・・・本祭りの日、御神輿が休憩する場所で、例大祭の時だけ設けられる。



発行元

日和佐ちょうさ保存会

発行
平成二十九年九月吉日

協賛



CypherTec Inc.

サイファー・テック 株式会社



awae

株式会社 あわえ



株式会社 鈴木商店



株式会社 兵頭デザイン



株式会社 ブックスタンド



ゼロ・クラフト 株式会社



MAME ZOU
Design Inc.

株式会社 まめぞうデザイン



株式会社 ヒトカラメディア



株式会社 SKEED



株式会社 イーツリーズ・ジャパン



HWS STUDIO



TAISHI ART WORKS

制作・デザイン

